

令和 7 年 6 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K00706

研究課題名（和文）英語教育における適切な語の数え方の提案 - 接辞知識の発達に関する包括的調査を通して

研究課題名（英文）Rethinking Word Counting in English Education: A Comprehensive Investigation into Affix Knowledge Development

研究代表者

笹尾 洋介（Sasao, Yosuke）

京都大学・国際高等教育院・准教授

研究者番号：80646860

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：令和2年度より順次施行されている現行の学習指導要領に基づく小・中・高等学校の英語教科書計103冊を分析し、派生語、多義語、コロケーションの観点から語彙の使用実態を調査した。派生語およびコロケーションは、小学校では限定的に導入されていたが、学年が進むにつれて使用の種類と頻度のいずれも段階的に増加することが確認された。多義語については、学習初期から周辺の意味で使用される語も確認された。いずれの観点においても、中学から高校への移行段階で語彙の急激な増加が見られ、学習上の困難を生じる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、小・中・高等学校の英語教科書を対象に、語彙の形の変化（派生語）、意味の広がり（多義語）、語と語の結び付き（コロケーション）の観点から語彙使用の実態を明らかにした。これまで英語教育では語彙数といった量的基準が重視され、こうした質的側面はほとんど考慮されてこなかったが、その質的側面に焦点を当てた点に本研究の学術的意義がある。また、教科書間や学年間で語彙の扱いに大きな差があることが確認され、特に中学から高校への移行期に学習負担が急増することが示された。これらの成果は、今後の語彙指導の改善や、学習者の負担軽減に資する教材開発に貢献すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：A total of 103 English textbooks for elementary, junior high, and senior high schools, developed under the current Course of Study implemented since 2020, were analyzed to investigate the actual use of vocabulary from the perspectives of derivational words, polysemous words, and collocations. The results showed that derivational words and collocations were introduced only to a limited extent in elementary school but gradually increased in both variety and frequency as grade levels advanced. Regarding polysemous words, some were found to be used with peripheral meanings even at the early stages of learning. Across all perspectives, a sharp increase in vocabulary was observed during the transition from junior high to senior high school, suggesting the potential for increased learning difficulty during this period.

研究分野：応用言語学

キーワード：語彙習得 教科書 接辞 派生語 多義語 コロケーション

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

外国語としての英語運用能力の向上において、多くの英語語彙を習得することが重要である。その一方で、英語には膨大な数の語が存在するため、すべての語を習得することは現実的に不可能である。このため、英語教育においては、語彙学習の数値目標をカリキュラムやシラバスにおいて設定し、さらに、その目標を達成することでどのような言語運用能力が身につくのかを学習者に明示することが重要となる。現行の学習指導要領(令和2年度より順次施行)では、小学校で600~700語、中学校で1,600~1,800語、高等学校で1,800~2,500語、合計で4,000~5,000語の習得が目標として掲げられている。しかしながら、この目標は量的基準に過ぎず、質的な基準が明示されていないため、教科書作成において語彙内容の偏りが生じる可能性がある。本研究では、こうした問題点を踏まえ、語彙学習における課題を次の3つの観点から検討する。

1つ目の観点は派生語である。先行研究では、日常会話の理解には約3,000語、さまざまなジャンルの英文を理解するには約8,000語、英語の聴解においては約6,000語の語彙知識が必要であるとされている。学習指導要領の語彙目標を考慮すると、高等学校卒業時点でかなりの言語運用能力が身につくように思われる。しかし、多くの研究と学習指導要領とは語の数え方が異なるため、実際に目標達成によって得られる言語技能は不明瞭である。先行研究においては、語の基本形と一部の派生形をまとめて1語と数える「ワードファミリー(word family: WF)」という単位が一般的に用いられている。これに対して、学習指導要領では「綴りが同じ語は品詞にかかわらず1語と数え、動詞の活用形や名詞の単複形など規則的に変化するものは辞書の見出し語を代表させて1語とみなすことができる」と定義されている。例えば *sleep, sleeping, sleeps, slept, sleepy, sleepiness, sleepily, sleepless, sleeper, sleepers* の10語は、WFでは1語と数えられるが、学習指導要領では7語として数えられる。このように、学習指導要領に基づく語数は、実際の言語習得度を過大に評価する傾向がある。その結果、学習指導要領の数値目標を達成しても、必ずしも十分な言語能力が得られるとは限らず、理論的根拠を欠いた目標設定となっている。その一方で、WFの基準では、Bauer & Nation(1993)が提唱した83種類の接辞(屈折形を除く)を含めることが一般的である。しかし、特に初級学習者がこれらの接辞をすべて理解しているとは考えにくい。こうした学術的背景を踏まえ、主要な学習インプットである教科書における接辞の出現分布を詳細に分析し、1語に含めるべき派生語の範囲を検討する必要がある。

2つ目の観点は多義語である。学習指導要領では、教科書においてどの語がどの意味で使用されるかに関する詳細な規定が存在しない。そのため、同一語でも使用される意味に偏りが生じる可能性がある。また、中学校で既習の語であっても、高等学校の教科書でこれまでに学習したことのない意味で使用される場合、学習者はその語の意味を正しく理解できず、学習の停滞を招くおそれがある。先行研究では、中核的意味から周辺的意味へと段階的に学習を進めることが効果的であるとの主張がなされている。しかし、教科書では多義動詞の中核的意味の出現頻度が低く、学習初期から周辺的意味が多く使用されているという、理論と実践の乖離も指摘されている。本研究ではこの点について定量的調査を行う。

3つ目の観点はコロケーションである。コロケーション(語の慣用的な結び付き)は、表現の自然さや流暢さを高めるうえで重要な役割を果たす。また、これらを定型表現として習得することにより、学習負担の軽減にもつながる。しかし、学習指導要領では「連語及び慣用表現」という項目は設けられているものの、コロケーションに関する具体的かつ詳細な達成目標は示されていない。そのため、教科書によってコロケーションの扱いに偏りが生じ、重要な表現が含まれていない場合がある。特に、*as well as* などの意味的透明性の低いコロケーションは、既知の語から意味を推測することが困難であり、新たな学習項目として意識的に習得する必要がある。本研究ではこの点についても定量的調査を実施する。

2. 研究の目的

このように、語彙学習においては、単に語数を増やすだけでなく、派生語、多義語、コロケーションといった質的側面にも十分な配慮が求められる。本研究は、これらの観点から教科書を分析し、語彙学習におけるより効果的な指導法の開発に資する知見を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

令和2年度以降に順次利用可能となった小学校英語教科書15冊、中学校英語教科書18冊、高等学校「英語コミュニケーション・・・」70冊、合計103冊の文部科学省検定済英語教科書を対象としてコーパス化し、分析を行った。本研究では、このコーパスを用いて、(1)派生語、(2)多義語、(3)コロケーションの3つの観点から教科書の内容を分析した。

- (1) 派生語: Sasao & Webb (2017)に掲載の118種類の接辞を対象に分析を行った。この接辞は、Nation (2004)のBNC word family listsに掲載されている高頻度10,000語のうち、2語以上に出現するものである。
- (2) 多義語: 高頻度で出現する自動詞(come)と他動詞(have)の語義の使用実態を調査した。
- (3) コロケーション: Martinez & Schmitt (2012)のPHRASE Listに掲載の505種類のコロケーションについて分析を行った。当該リストには、大規模英語コーパスにおいて高頻

度で出現する意味的透明性の低いコロケーションがリスト化されている。

4. 研究成果

(1) 派生語

接辞の種類：全 118 種類の接辞のうち、小学校では 28 種類 (24%)、中学校では 79 種類 (67%)、高等学校では 112 種類 (95%) が使用されていた。学年別に見ると、小学 5 年生では 19 種類 (16%) であったものが、高校 3 年生では 109 種類 (92%) まで段階的に増加している。特に注目すべきは、中学 1 年から 2 年にかけて 26 種類、中学 3 年から高校 1 年にかけて 29 種類という急激な増加が見られた点である。接辞の導入パターンに着目すると、小学校では形容詞化接辞 (-y, -ful, -ous) が中心であり、中学校では名詞化接辞および副詞化接辞が本格的に導入される。さらに、高等学校では動詞化接辞 (-ize, -ate) や否定接辞 (un-, in-) が加わり、語彙の質的な拡張が図られている。

派生語の種類：小学校では教科書 1 冊あたり平均 13 種類の派生語が使用されていたが、中学校では 78 種類 (約 6 倍)、高等学校では 289 種類 (約 3.7 倍) にまで増加した。学年進行に伴う変化では、小学 5 年生の 10 種類から高校 3 年生の 400 種類まで、40 倍の増加が確認された。特に、小学 6 年から中学 1 年にかけて 2.3 倍、中学 1 年から 2 年にかけて 2.1 倍と、急激な増加が見られる。また、高頻度で使用される接辞ほど多様な派生語を生み出す傾向があり、とりわけ -ly や -ion などの主要接辞は、語彙形成に極めて大きな貢献をしている。

派生語の使用頻度：派生語の使用頻度は、小学校で教科書 1 冊あたり平均 20 回、中学校で 150 回、高等学校で 579 回となり、学年が進むにつれて大幅に増加している。学年別に見ると、小学 5 年生の 14 回から高校 3 年生の 821 回まで、約 59 倍の増加が認められた。最も頻繁に使用された接辞は副詞化の -ly であり、次いで名詞化の -ion、人や物を表す -er が続いた。接辞別の使用推移の観点からは、-ly は小学校ではほとんど使用されていなかったが、中学校で徐々に導入され、高等学校で急増した。-ion も同様の傾向を示すが、高等学校での増加はさらに顕著であった。

(2) 多義語

自動詞 *come*：中核的意味は中学 1 年で最も多く使用され、その後は学年の進行に伴い徐々に減少した。一方、周辺的意味は学年が上がるにつれて段階的に増加し、特に高等学校では抽象的な意味での使用が顕著となった。共起する主語の傾向をみると、中核的意味では主に生物名詞 (80%) が使用されていたのに対し、抽象的な周辺的意味では無生物名詞 (90% 以上) が主体となっていた。

他動詞 *have*：中核的意味の使用頻度は全学年を通して極めて低く、中学校教科書全体でわずか 3 回の出現にとどまった。学習初期から複数の周辺的意味が高頻度で使用されており、特に抽象的な無生物名詞を目的語とする所有の意味が中学 1 年から多用されていた。周辺的意味の使用パターンには学年による大きな変化は見られず、中核的意味が導入される前段階から、すでに複数の周辺的意味が使用されている状況が確認された。

(3) コロケーション

コロケーションの出現頻度と分布：BNC (British National Corpus) カバー率は学年の進行に伴い段階的に増加し、小学校では約 0.2% であったものが、高等学校では約 1.7% にまで上昇した。タイプに基づく PHRASE List (PL) カバー率も同様の傾向を示し、小学校では約 5% であったものが、高等学校では 67~77% にまで大幅に増加した。特に、中学校から高等学校への移行期に急激な増加が見られ、中学 3 年から高校 1 年にかけては、コロケーション数が 2 倍以上に増加していた。

教科書に含まれないコロケーション：教科書コーパス全体において、PL に記載された 505 のコロケーションのうち 83 個 (16.4%) は一度も出現しなかった。これらの未出現コロケーションは、コロケーションを構成する語のレベルが高くなるにつれてその数が増加し、特に 4,000~5,000 語レベルにおいて最も多く見られた。これは、教育場面で活用の目的として選定された PL の重要コロケーションが、教科書に十分に反映されていないことを示している。

教科書シリーズ間の差：教科書シリーズ間では、コロケーションの出現に大きな差が認められた。中学校では最大で約 1.9 倍、高等学校では最大で約 4 倍の差が認められた。さらに、高等学校の一部教科書では、中学校のいかなる教科書よりも PL カバー率が低いという、校種間を超えた逆転現象も確認された。

共有率の分析：中学校までは、全コロケーションの 3 分の 2 以上が共有率 0%、すなわち、どの教科書にも共通して出現しない状況にあった。高等学校では共有率がやや改善し、共有率 0% のコロケーションは高校 1 年で約 33%、高校 2 年で約 23% まで減少した。しかし、半数以上の教科書で共通して使用されているコロケーションは依然として 10% 前後にとどまっており、コロケーション指導の一貫性には課題が残されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 赤松春奈・笹尾洋介
2. 発表標題 新学習指導要領に基づいた英語検定教科書における多義動詞の語義分布 comeとhaveに焦点を当てて
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中野珠悠・梁震・笹尾洋介
2. 発表標題 英語検定教科書コーパスに基づく高頻度コロケーションの分析
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------